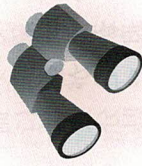


# レームダック

## 退任首相の訪米の意義は？



再選が阻まれて、残り任期にある政治家を米国などでは「レームダック（死に体）」と揶揄的に呼ぶことがある。9月初めに総裁選出馬断念を表明した菅義偉首相はまさしくレームダックだ。本人の認識はともかく、国際的に見れば10月には首相の座にいない人物は、政治的な存在感は

ほとんどない。

もともと国際的な舞台に立つた時には存在感がないことが話題になったほどだが、退任の直前に訪米することになった。国連総会で各国首脳がニューヨークに集まることを機会に、日米豪印4カ国首脳会談に出席するためだ。

しかし、これはどういう判断・認識に基づくものだろうか。このクアッドとも呼ばれる首脳会談は、3月に行われたオンライン会議に続くもので、対面での会談でこれまでの合意を確定するというこのようだ。

菅首相は訪米出発に際して、「4カ国の間で（新型コロナウイルス）ワクチン、新しい技術、気候変動とい

う重要な課題についてそれぞれ会合し、『自由で開かれたインド太平洋』の具体化の道を探っていく」と述べたと報じられている。いずれも重要課題だが、翌月には首相の座を退くことが確定している人物を相手に各国首脳がどれだけ真剣な話し合いに臨むかは怪しい。

総裁選の見込みも不確かで、自民政権が総選挙でどれだけ議席を減らすかも分からない国内事情は、米豪印の首脳にも見えている。弱体化し、国内で十分な議論がなされていない問題について日本が同意を表明してもどこまで信頼されるのか。あるいは、日本の弱みにつけ込んで、米国主導での合意を押し切る好機とみているのか。

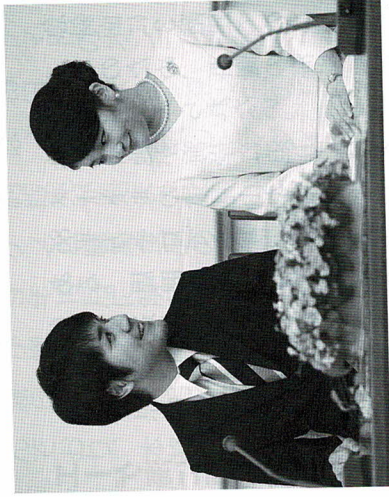
外交上の約束が反故にされることはないだろうが、本来であれば、新政権に委ねられるべきことではなかったか。この合意は10月以降に成立する新政権の手足を縛ることになるかもしれ

ない。退任する前任者がなすべきことはほかにもたくさんあったはずだが、この首相の行動があまり問題視されていないのはどうしたことか。

コロナ感染症対策は、感染拡大の勢いが緩んで9月末までの緊急事態宣言の解除が課題となっている。この判断も菅内閣の判断に委ねられている。しかし、先の見えない状況のなかで、昨年秋のように楽観に流れて感染の再拡大のリスクを冒すことはあつてはならないし、新政権が柔軟に判断できる、選択肢の多い状況を作り出す配慮が必要だろう。しかし、自らの功績を誇りたい菅首相に冷静な判断ができるだろうか。

花道を飾りたくとも、総裁選に過熱する報道は、首相の訪米にも関心が薄い。レームダックの菅首相の帰国よりも、1日遅れで帰国した小室圭さんが国民の話題をさらった。

（東京大名塾教授 武田 晴人）



婚約が内定し、記者会見される秋篠宮家の長女眞子さまと小室圭さん＝2017年9月、東京・元赤坂の赤坂東邸